

欧州美術品市場の現状および日本人顧客の動向

— 日本生命ロンドン事務所 —

1. はじめに

近年、日本人・日本企業が欧州で、次々とゴッホ、ピカソ等の高価な絵画を購入したという記事をしばしば目にする。かつては高嶺の花の欧州の美術品が、急に我々日本人にも身近に感じられるようになり、一つの投資の対象としても注目されるようになってきている。この、欧州における美術品市場は如何なる形態をなしているのか。また、日本人投資家は、その市場にどれほど影響を与えているのだろうか。

経済的な分析を行うには非常に把握しにくい業界であり、統計資料も極端に少ないため、インタビュー等を通じて実像に迫る必要があった。

また、美術品と言っても、絵画から宝飾品、アンティーク家具、銀食器、時には貴族の宮殿まで含まれる。ここでは、美術品マーケットの中心をなす、絵画を軸に、オークションマーケット、ギャラリー、収集家間売買を把えるとともに、日本人の投資状況について報告することとしたい。

2. 市場構成

I オークションマーケット

○主要なオークショナー（サザビーズとクリスティーズ）

オークションとは、文字通り競売のことであり、値段をあらかじめ提示せず、商品を買手が互いにせり合って最高の価格でせり落とす販売方法を言う。

ロンドン、ニューヨーク、パリが世界の三大美術市場と言われるが、その各都市に、一流品からいわゆるガラクタまで扱う業者を含めれば数万軒のオークショナーが存在している。

現在、ロンドン、ニューヨークで一級品のオークションで、独占的シェアを占めるのがサザビーズとクリスティーズである。

パリには、国営のオークションハウス、オテルドルオーがあり、国が場所を提供し、国家試験に合格した競売士がその日毎に単独、あるいは数人で組んでオークションを開催している。

サザビーズは、1733年に書店として設立され、1744年3月11日に初めて書籍のオークションを行った。その歴史的経緯から、1950年代までは主に書籍を扱うオークショ

ナーであったが、1957年にワインパーク、1958年にゴールドシュミットの世界的な注目をあつめた両コレクションのオークションを担当、大成功を収め、世界中にサザビーズの名を知らしめた。これにより美術オークショナーとしての地位を確立し、以後業界首位の地位を守り続け、現在では年25万点以上の作品を取扱う大オークションハウスとなっている。海外にも展開を進め、1964年には、米国最大のオークションハウス、パークバーネットの株式75%を買収、サザビーズグループの一員に加えた。サザビーズ自体について言えば、1977年に株式公開されたが、1983年に敵対的買収が仕掛けられたことをきっかけとして、会社は再度Private Companyに戻っている。

クリスティーズは、1766年に設立され、美術品、宝石、ワインなどのオークションハウスとして営業していた。新聞への広告で相場を発表することで徐々に知名度を上げ、オークションルームは18世紀後半以降の上流階級の社交の場ともなっていた。産業革命によるイギリスの富の累積と、フランス革命による財宝の流入により、事業は大発展を遂げた。

大恐慌、第二次大戦等での事業の停滞や、1950年代後半のサザビーズの成功で、その後塵を拝することになったが、事業は確実に拡大し、1973年には株式公開を行い、社名もChristies International Plcとなった。

現在、世界25ヶ国に事務所、1,240名の従業員を有している。(表-1参照)

表-1 サザビーズ・クリスティーズ売上高推移

* シーズン (年)	サザビーズ (千ポンド)	クリスティーズ (千ポンド)
1981-82	267,000	192,633
1982-83	272,759	229,400
1983-84	401,000	350,600
1984-85	502,224	337,510
1985-86	473,317	361,180
1986-87	853,500	581,155
1987-88	864,809	639,000

*オークションのシーズンは、9月→7月で、8月はほとんど開催されない。

○オークションのルールと手数料

国ごと、オークションハウスごとに手続きとルールは若干異なるが、基本的に次のようになっている。

- ①売り手がオークションハウスに品物を持込むと、オークションハウスは、美術館並みの膨大な資料と専門家によって、その作品の出所、文献、出品歴等を確認する。

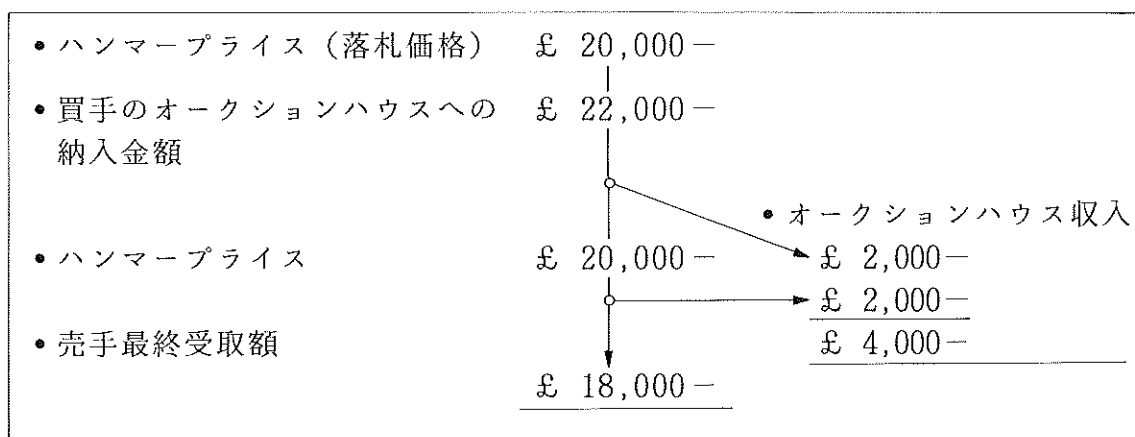
写真を撮り、確認した事項と共にカタログに記載する。この際、カタログにオークションハウスは、落札予想価格も付記する。確認事項でミスを犯すと信用問題となるため、オークションハウスは万全を期して調査を行う。

- ②売り手は落札最低価格を設定することができる。(もし、せりにかけて最高価格がそこまで達しない場合は、売り手に返却されるか次回オークションまで回すことができる。)
- ③オークションの約1ヶ月前にカタログが年間購読者および希望者に配布される。オークションの日の数日前に現物がショールームに掲示され、入札希望者は直接手にとって確認ができ、オークションハウスの専門家が質問に答える。
- ④オークションは、競売人が徐々に価格を上げ最後まで残った参加者に売却される。海外、地方からの電話での参加や事前の入札価格指定も受付られる。競売参加者は、手を上げる、手に持ったカタログを上げる等通常は明確な動作をもって意思表示を行う。人によっては、耳に手を当てるなど特殊な動きで示す人もいる。多少まぎらわしい動きがあっても、間違いが起こることはまずあり得ない。競売人は長年の経験を持っており、参加者の意思を、視線を合わせることで確認できるし、また、「あなたはせていますか。」と最後に確認するので錯誤はありえない。
- ⑤落札した人は、数日以内に現金を払い込む。また、約1ヶ月以内に品物を引き取らねば保管料を請求される。

○オークションの手数料

手数料は、品物が1,000ポンド以上であれば売り手、買い手共に10%をオークションハウスに支払わねばならない。表-2を参照いただきたい。

表-2 手数料の仕組



<説明>ある絵画が2万ポンドで落札されたとする。買手は、10%を上乗せしオークションハウスに支払う。オークションハウスは、落札価格の10%を差し引いた1万8,000ポンドを売手に支払う。よってオークションハウスは落札価格に対し20%の手数料を得る。

○Sotheby's Indexの仕組と絵画価格の推移

美術品価格の動きを計る基準として、毎月サザビーズが発表しているIndexがある。

これには美術品ジャンル別の価格インデックスと、全体平均のインデックスとがある。

計算方法は、表一3のように、13種のカテゴリーに分け、各項目毎に代表的な作品を30～40点ピックアップして価格の推移を見る。これらは、一流品から中級品まで各セクションの専門家の裁量により選び出される。

一例を上げれば、英国製銀製品は48点の作品が選ばれており、1975年を100として平均価格を算出するが、この作品群は17～18世紀を中心とした銀製品で、燭台、食器、盆など、様々な分野から、最高の職人と中堅の職人の作品から成っている。毎月その作品がオークションに出るわけではないので、それに準じた作品の値動きとその分野の需給を反映し、専門家が再査定価格を決定する。また、この作品群からは各カテゴリーの最高価格水準の作品は除外される。これらは毎回オークションに出てくるわけではなく、かつ平均価格に与える影響が大きすぎるためだ。同様に最低水準の作品も除外される。これら作品の平均価格が美術品別インデックスとなる。各インデックスに美術市場での重要性を加味するために表一3のようにウエイトをつけ、加重平均を算出する。これで全体平均インデックスが求められるのである。

表一3 全体平均算出のための、美術品ジャンル別のウエイト分配率

	All Sectors	Excluding American* Sectors
Old Master Paintings	15	16
19th C. European Paintings	11	12
Impressionist Art	20	21
Modern Paintings	12	13
Contemporary Art	6	6
American Paintings*	3	—
Continental Ceramics	2	2
Chinese Ceramics	7	8
English Silver	4	4
Continental Silver	3	3
American Furniture*	3	—
French & Continental Furniture	7	7
English Furniture	7	8

(出所) Sotheby's Research Dept

これらのインデックスは実際に取引が行われた作品ではなく（行われることも当然あるが）、あくまでも比較と査定によるものであり、実際この40点が市場に出たらど

のような価格になるか誰も予想できないと言える。その意味では厳密な市場インデックスとは言い難い面もあるが、毎月実際に取引された中で、ほぼ中級程度とされる作品の価格を数十点選んで毎月全く異なる作品の平均価格を示すよりは、常時同じ作品を査定する方が、指標としての信頼性は高いと言えよう。

サザビーズは、公平性を守るため、選択した作品名は明かさないし、時にはその作品も必要ならば入れ替えを行なう。査定価格については、長い歴史を持つオークショナーであり毎日のように行われるオークションの落札予想価格を付けるのは彼ら自身ということからも、実体と大きくかけ離れた価格を付ける可能性は、極めて薄いと言えよう。インデックスは、1975年より14年間の価格推移を示した数値であり、恣意的に調整を行っていけば、実態から既に乖離してしまっている筈である。その点でも、混沌として複雑な美術品市況を測る指標としては、唯一公表され、かつ、参考たりうる指標といえる（表－4、5参照）。

ここで各作品群の価格の推移を、見てみたい。表－4、5で特に目につくのは、印象派とモダンアートの'88年に入ってから急激な上昇で、対前年12月比で印象派は1.74倍、モダンアートは1.50倍となっている。遂に英国銀製品は1.02倍（銀価格の低迷も要因であろう）、米国家具が1.05倍、18世紀以前の巨匠絵画も1.26倍で、前述の2つがいかに突出しているかがうかがえよう。

これは主としてこのジャンルの作品が、従来に比し一部高値で取引されたことを反映しているといえる。例えば、印象派の巨匠の絵画が異常な高値で落札されたとする。市場は、落札された絵画の美術品としての出来、評価を加味しながら即座にその画家の絵画全てに、その上昇を反映させる。また、その画家と同時代の類似したジャンルに属する画家の絵も同様の影響を受ける。例えばゴッホの“ひまわり”が、'87年3月に24.75milポンドで落札された当時、その高さが話題を呼んだが、その年の秋には、その価格を20%も上回る価格で同作者の別の作品（“アイリス”）が、落札されている。

表4－i サザビーズ平均インデックスの推移

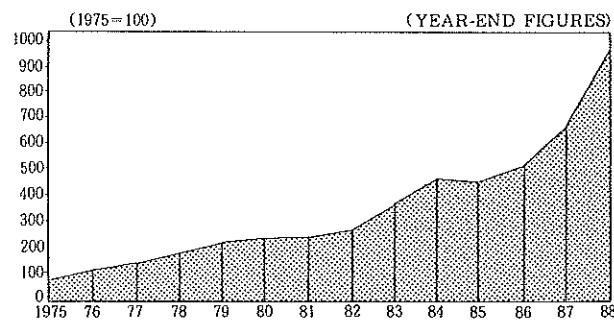
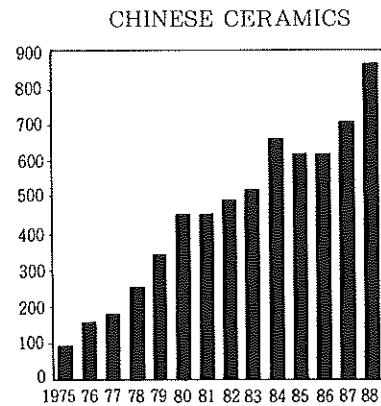
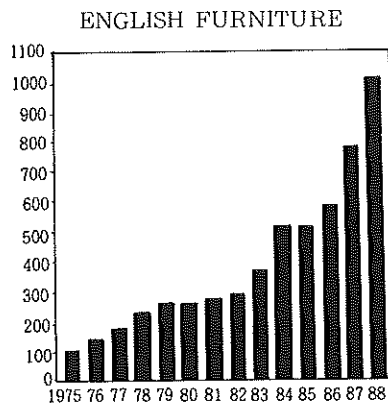
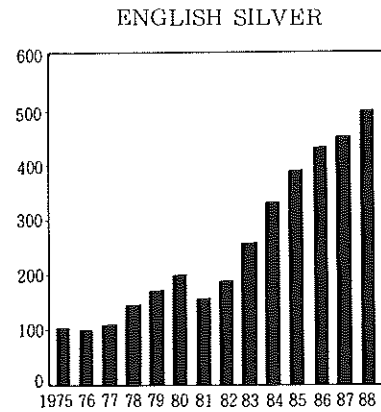
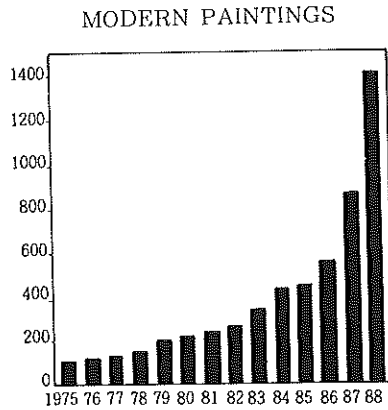
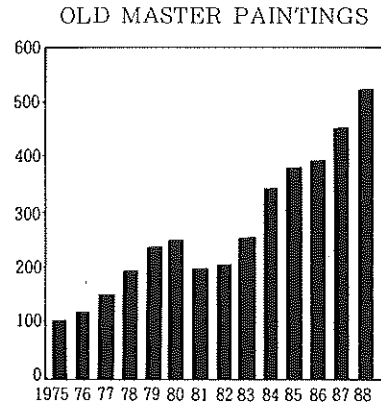
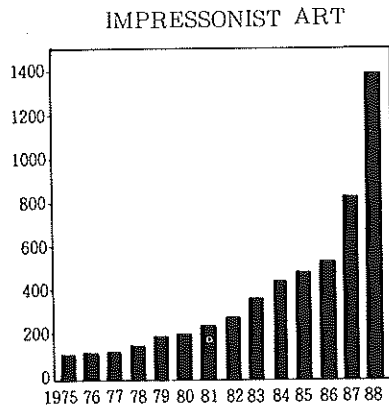


表4-ii 美術品別サザビーズインデックスの推移



(出所) Sotheby's Art Market Bulletin

印象派は昨年モネ、ドガ、セザンヌらも過去最高の価格を記録し全体でもサザビーズの印象派のインデックスが'88年12月に前年比73.6%の上昇を示し、平均インデックスが43.9%伸びる大きな要素となった。

表-5 SOTHEBY'S ART INDEX- (USドル建)
(1975-1988 sept)

CATEGORY	BASE Sept 1975年	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年	1985年	1986年	1987年	1988年
Old Master Paintings	100	255	199	199	217	251	289	303	349	403
19th C. European Paintings	100	225	176	183	197	220	249	250	303	361
Impressionist Art	100	206	239	255	298	317	371	432	661	1,091
Modern Paintings	100	204	232	245	275	301	342	429	666	1,090
Contemporary Art	100	239	285	333	383	435	488	542	597	728
American Paintings*	100	350	424	459	501	589	635	687	789	958
Continental Ceramics	100	336	299	266	272	284	284	290	320	407
Chinese Ceramics	100	462	459	460	445	482	486	486	550	684
English Silver	100	205	160	183	219	237	298	338	349	388
Continental Silver	100	179	143	134	156	161	178	192	201	260
American Furniture*	100	172	209	213	239	241	324	380	452	469
French & Continental Furniture	100	232	218	234	254	270	273	285	319	355
English Furniture	100	256	270	263	309	360	382	447	594	784
AGGREGATE-full sequence	100	253	244	251	275	302	336	369	475	660
" -excluding American* Sectors	100	254	241	247	270	296	328	361	469	661

(出所) Sotheby's Research Dept

○美術品流出保護

英国で国宝級の美術品が所有者によりオークションハウスに持込まれた場合、どのような海外流出保護策が講じられるのであろうか。ちなみに、英国では我が国のような重文指定等による売買規則はなく、原則自由となっている。オークションハウスでは世界中の収集家に参加を認めているし、売り手の不利益となるような外人締め出しは行なえない。しかし、オークションハウスとしても、流出させたくない品物、日本で言えば法隆寺の玉虫厨子や広隆寺の弥勒菩薩のような作品は誰でも外人に売りたくないと思うわけであり、出来れば国内の収集家に落札してもらいたいと考える時がある。この場合、オークションハウスは、芸術担当庁に報告する。そして美術品流出を保護する委員会の審査によって、その作品の保護を決定した場合、直ちに国内で保護基金を設立し、美術館等で購入すべく6ヶ月民間に援助を要請する。この間オークションは延期される。この基金活動が不調に終わった場合は、オークションにかけられることになるが、£15,000以上の美術品の輸出は許可制であるため更に数ヶ月保留される。この期間で基金が集まらない場合は、国民がそれを認めたものとして輸出が許可されることとなる。

II ギャラリー（画商）とコレクター間売買

<画商について>

美術品市場でもう一方の大きな要素に、画商の存在がある。これは多種多様で、有

名画家の絵画を仲介するだけの所、店舗を持って売却までの絵画の購入リスクを取る所、安価な版画、絵画を大量に扱う所、無難で美しい絵をオークションで落札し、デパートの美術品売場に納入する所、新人発掘に努力する所等様々で、一軒ごとにその性格が異なる。オークションハウスとの一番大きな違いは、販売方法が異なる点であるが、そのほかに、自分の売りやすい美術品のリスクをとって取扱う点である。顧客がその美術品をある値段で必ず買うと注文していれば、リスクはなく、いくら高くても取扱えるが、そうでない場合、彼らには売れるものを仕入れる必要があるのだ。

ゴッホ、ルノアール、レンブラントその他有名画家の超一流水準の作品は、殆んどがオークションハウスに出される。売り手も正当な市場価格で売りたがり、かつ数十億もの絵画は一画商がリスクを取るには大きすぎるからだ。

それ以下の評価の作品は、画商単独、画商間で取引されることも多い。前述の通り、買取りリスクや仲介リスクが比較的小さく、また、顧客に対しオークションで落札するであろう価格水準にかなりのプレミアムを付けて販売することも可能だからである。

次に、2級以下で評価のかなり難しい安い美術品や、少し疑わしい作品は、またオークションハウスに流れてゆくことが多い。売り手も売りにくく、価格設定が難しく、画商も1枚当りの利益が少ない割にリスクがあるからである。

よって、取引品によってある程度の棲み分けが存在するとも言える。ただし、この中級作品の取引の場合にもオークションハウスの存在は大きい。オークションに立合う参加者の多く（6割超）は画商であり、ここが仕入先であり、販売先となる事も多のだ。

<コレクター間売買>

コレクター間売買について簡単に説明したい。これは全く画商を通さずに、所有者が直接購入希望者に譲渡したり、現物交換し差額を支払う等の行為によって成立する。画商が直接コレクターの所に行き、買取り、また直接コレクターに売渡す場合も、どちらかと言えばこの範疇に入ろう。

この売買のメリットは、

- ①欲しいと思った美術品をその時入手できる。
 - ②互にメリットがあれば交換して安く手に入れることも可能（金融スワップのように）
- 以上が主な理由だが、実は、更に以下の理由でも個人間売買は行われる。
- ③オークション等で売買すると、売買価格が公開されるため、税務当局に完全に捕捉されてしまうが、直接売買、いわんや物々交換ならば減額申告も可能であること。
 - ④国宝級で売買が規制にふれる可能性、また国外持出しが問題となる可能性のある絵もコレクター個人間で秘密裡に収集することができる。この売買がどの程度の規模

であるのか把握は難しいが、取引全体数からいけば大きな占率とはならないであろう。

これらの取引が複雑に機能し合い、その時代に一番隆盛をきわめた国に流れてゆくの
が美術品であり、それを仲介するのが美術品マーケットなのである。

3. 市場規模と日本人投資家の影響

美術品市場の欧米全体の規模を正確に把握することは、市場の性格上不可能ではあるが、大まかな数字を推定してみたい。

美術品業界の人々からのヒヤリングによれば、オークションマーケットは全美術品マーケットの取引の過半教を占めるとというのがほぼ一致した見解であった。オークションそのものは、サザビーズとクリスティーズではほぼ寡占状態といえるシェアを維持している。

Sotheby's Research Dept. の報告によれば、サザビーズ、クリスティーズ合計の売上高は'87～'88シーズン（9月～8月）で約£1,500mil（\$2.6bil）となっている。仮にこの2社がマーケットの半分を支配していると考えれば、日本円にして年間6,800億円の売上を有する巨大な市場であるということになる。これに、画商が市場の中心となっている日本の画家の西洋画市場と、前述のコレクター間の特殊売買を含めると1兆円に近い規模になると思われる。

この市場に日本人はどの程度の影響を与えているのだろうか。日本人の投資が価格をつり上げているという噂は本当だろうか。

買い手はほとんど公開されないため、オークションハウスと、日本人投資家の仲介をする画商の説明に頼るしかないが、これを総合すると、以下のような姿が浮び上がってくる。

- ①日本人は従来より印象派絵画投資が中心で他にはあまり興味を示してきていなかった。たしかにゴッホ、ピカソ等有名な絵画では市場を賑わすが、ここ数年の印象派売上中の割合では実際は、日本購入分23～25%、米国購入分50%、欧州購入分25%程度であり、市場を席捲すると言う程ではない。
- ②戦後米国が資力にもものを言わせて独占的に美術品を買い漁った時期があったが、それに比べれば日本人の態度は未だおとなしいと言えよう。当時米国は美術品全般に亘り購入したが、日本人のそれは特定のジャンルに限定されている。
- ③最近注目すべき変化は、数年前の米ドルの価値の低下と対称的に日本人の投資がふえてきたことと、この2～3年で、印象派の絵画と中国陶器から、少しずつながら19世紀絵画、宝石、現代絵画へと対象が広がってきたことである。作品の背景を理

解するのが西洋人にも難しい宗教画までが購入され、日本人収集家購入層が広がった兆候が見られる。

Sotheby's Research Dept.のMr.J.Ecksteinの、「日本円の上昇率が、美術品価格の上昇率より高くなったため、日本人投資家が有利になり、市場での存在が大きくなったと言える。」との発言が象徴的であった。

たしかに、日本人が価格面での引き金になったかもわからないが、実は意外にも価格急上昇した印象派絵画'87~88シーズンの買い手の主役は欧州のコレクターであり、印象派売上の60%は欧州勢で占められた事実からして、価格急騰の原因を日本人のみに求めているのは当を得ていないとも言えよう。

4. おわりに

簡単にオークションマーケットを中心に、美術品市場の現状をまとめてみたが、美術品投資について付記しておきたい。

日本人投資家は、有名画家の、特に印象派の作品であれば、作品としての出来を問わずに入手したがる傾向があると言われる。これは、日本人の美術教育の影響で洋画といえば、教科書に印象派が中心に載せられているため、半ば偏重的にこの時代の画家を信奉してしまう傾向があることと、画家毎に1号いくらの日本独自の号数取引が影響しているらしい。当然、巨匠の作品にも傑作と、そう呼びがたいものもある。

また、純投資として見た場合、購入時にオークションで10%の手数料、銀行金利+保管+輸送で10%、売却時に10%の手数料が必要となるため、1年間の投資なら30%以上の値上りをしなければ利益は出ない。

過去10年間で印象派絵画は、平均して6倍程度の値上りをしたが、この様な投資対象となるのは美術館に飾られる様な数千万円以上の絵画である。

数百万円から2,000万円レベルの絵は、金利分の価格上昇があれば良い買物と見るべきというのが画商の見解である。それ以下では、売買が難しく、あくまでも趣味と割り切った方が無難との事。

「伝統の違いもあるが、購入することの喜びよりも、保存し鑑賞する喜びをもっと味わってほしい。」との、先日会ったあるパリの画商の言葉が、今の日本人の動向を一言で表しているようである。

(ロンドン事務所：細田 晃)

取材協力：サザビーズ、クリスティーズ、London Art Library、安田火災(株)、三越、Khoetsu Fine Art、Arnhold co、他欧米、日系ギャラリー